

都市における反原発市民運動の生成と展開

安立 清史

社会運動研究において、世界的に「新しい社会運動⁽¹⁾」の発生と展開とが注目を集めている。しかし日本における研究状況は、欧米の「新しい社会運動」理論（A.トゥレーヌ、A.メルッチ、J.ハバーマスなど）の研究が主で、具体的な事例研究に乏しかった。我々は、愛知県名古屋市の「都市における反原発市民運動」組織への、3年間にわたるインタビュー調査と機関紙の内容分析から、この運動の中に、日本における「新しい社会運動」の萌芽とも呼ぶべき運動展開がみられることを発見した。本稿では、この運動事例と欧米の新しい社会運動理論とを比較検討しながら、日本での新しい社会運動の展開はいかなるものか、そして、こうした運動が直面している問題は何か、などについて考察する。

1. <新しい社会運動>と「新しい」社会運動

<新しい社会運動>とは何か、という問いではなくて、社会運動の「新しさ」とは何か、という問いを立てるべきである。「新しい社会運動」という唯一の運動実体があるわけではないのだから（→Melucci〔1980〕）。さらにまた、なぜいま、「新しい」社会運動がことさら論じられるようになったのか、という問いも考察されるべきだろう。

*

社会運動の「新しさ」は、理論的には3つの方向に向かってありうる。その三方向とは、運動の「主体 *identité*」, 「敵手 *opposition*」, 「係争目標 *enjeu*」という社会運動を構成する基本的な三要素から現れるものである。そして、A.トゥレーヌは、これら三要素が総合的に変容するとき、それを社会運動をめぐる全体的な土俵の変動、つまり社会運動の全体性 (*totalité*) の変容とみなす (Touraine〔1978=1983〕)。

トゥレーヌらは、これら社会運動の三要素が、総合的かつ相乗的に「新しく」なることをもっ

て<新しい社会運動>の生成と呼ぼうとしている。したがって<新しい社会運動>は、今のところ「理念的構成物である」(Melucci〔1980〕)ということになる。

しかし<新しい社会運動>(The New Social Movement)は、いまだ理論的水準でしか語れなくても、「新しい」社会運動 (new social movements) は現実には様々な形をとって生成してきている。そこに着目し、社会運動の様々な「新しい」展開の萌芽が、社会運動を全体的に自己革新していく端緒を開示している、とみなす分析が、欧米の「新しい社会運動」論の骨格である。ハバーマスはこうした「新しい」社会運動の具体例として、1.反原子力とエコロジーの運動、2.平和運動、3.住民運動、4.アルタナティブ (対案提出運動)、5.少数者運動 (老人・同性愛・身体障害者等)、6.青少年の精神解放運動、7.宗教的根本主義、8.税制反対運動、9.学校批判運動、10.近代化改革への抵抗運動、11.女性解放運動、を挙げている (Habermas〔1981〕)。こうした諸運動が、すべて総合的かつ全面的に「新しい」とはいえまい。先に示し

た三要素全体の革新，というよりはむしろ三軸が個々独立にさまざまな方向へと分岐・分散していつている，とも見えよう。例えば「主体」の転換の方向には主として，3・4・5・6などがあり，「敵手」の変化の方向には，2・4・6・7・9等が入り，そして「係争目標」の際立った変化としては，1・4・5・9・11などが含まれる，という大まかな見取図を作ることが可能である。しかし，こうした分類に格別の重要性があるわけではない。また，こうした「新しさ」の様々な展開が，社会運動を総体として〈新しい社会運動〉へと導いていく，というよりは，当面むしろ運動をさらに細かく細分化していくようにも見える。ただし，どの運動も構成要素のどこかしらが少しづつ地殻変動しつつあって，いま求められている運動の「新しさ」の在処を，それぞれ断片的ながら指し示している，そのことが重要である。しかし，運動構成要素のこうした変動がどこへ向かうのか，その行方が不透明であるために，この「新しさ」は現在，危うく揺れ動いている。

これまでの「新しい社会運動」論では，旧社会運動（例えば生産点における労働運動）にとってかわる新社会運動（例えば生活点における住民運動），という形で「新しさ」が一方向的，一次元的なものとして論じられ，問題設定がなされてきた。しかし現在見られる運動の「新しさ」には多様な方向があるし，その多方向性は，理論的には三要素が相互に独立に変化しているところから現れたものであろう。ならばこそ「新しい」社会運動とよばれる運動形態が現在，多彩に分散・分岐しつつ現象しているのである。だから根本的な問題はむしろ，こうした「新しさ」が相互に独立に変容しはじめたのは何故か，そして今，そうした意味での「新しさ」が運動する人々をとらえ始めているのは

何故か，という処にあるように思われる。

＊

新社会運動の現象的な「新しさ」を追尾し，整理するだけでは不十分である。「新しさ」はつねに更新され，消費されては古び去っていく。必ずしも新しいがゆえに可能性があるわけではないし，その新しさの行先に社会運動の蘇生と革新とがある，と素朴に信じられうる時代でもない。

本稿で問題とするのはしたがって，〈新しい社会運動〉とは何か，ではなくて，こうした「新しい」運動の出現の意味するものを解きほぐし，そこに現れる運動状況の現在における諸問題を考察することにある。以下の調査研究は，こうした問題意識のもとでなされた⁽²⁾。

2. 都市における反原発市民運動

我々の調査対象は，反原発を掲げて1978年に名古屋市で誕生した市民運動組織である。その誕生にあたっては，従来の反原発運動とは異なり，労組の政治運動や原発立地現地での反対闘争の支援組織としてではなく，読書会グループの原発問題の研究が基礎になっている。中心となったのは，1970年代の全国的な公害告発運動に良心的科学者としてかかわってきた人達である。彼等は1960年代末の大学紛争時に学生時代を過ごした，いわゆる全共闘世代の人達が大半であるが，その後も公害告発運動や住民運動にかかわりつづけるなかで，政党やその運動組織に従属したり，現場を持たない助人的な運動ではなくて，自分達の問題を自分達で闘うという意味での主体的な運動をつくろうとしてきた。現在，運動の中心的メンバーは10名前後であるが（会社員，塾教師，タイピスト，公務員，主婦，左官，学生など），月刊の機関

紙を通じて購読者は全国的に広がり、潜在的支持層の裾野は広い。

当初の活動は、原発問題に関する読書会や学習会、シンポジウム・講演会の主催などであったが、次第に原発建設の公開ヒアリング反対闘争や核燃料輸送の監視行動などにも加わるようになる。それとともに密度と内容の高い月刊機関紙を現在に至るまで休むことなく発行し続け、名古屋における市民運動の中心的存在ともなっている。

そして愛知という保守的な土地柄のなかで孤立することの多い市民運動体間のネットワーク形成や連合の問題にも取り組んできた。そのひとつとして、この運動体が中心となって1982年から1984年にかけて、年に一度「五月民衆ひろば」という、愛知県下の様々な市民運動体の結集と連帯の実験を試みられた。これは何らかの具体的な政治的争点を掲げての既存の社会運動諸組織の連合ではなく、1970年代から現れてきた生成途上の市民運動体の間に、地道に信頼できうる人間関係とネットワークとを築き、そのなかから共有できうる運動戦略や運動論を共同して創りあげていこうとする試みであった。それと並行して、北海道の花崎皋平らが提唱して始まった「地域を拓くシンポジウム」という、年に一度の全国の住民運動体の横断的交流の場（→花崎〔1985〕）へも積極的に参加して、市民運動の全国的なネットワーク形成と「地域」を根拠にした新しい市民運動戦略の構築にもかかわってきている。

＊

この運動体の第一の特徴は、「都市社会運動」(M. Castells)としての市民運動であることだろう。原発現地の住民運動でも、労組の政治運動でも、新左翼の運動でもなく、イデオロギーや階級性、地域性などを根拠にした組織動員に

よらず、個々の市民の自発的・主体的結集という形をとる。これは、全共闘以来のさまざまな運動体験を踏まえたうえで、改めて運動の本来的な場所へと回帰して選ばとられた運動形態であり、原発問題を単なる公害問題や地域問題としてではなく、現代社会の諸矛盾のひとつの象徴的集約点として位置づけている。そこでは運動者自身も原発問題が象徴する矛盾と無縁ではありえず、原発を生み出し、必要とする社会に深く囚われ、無意識のうちに関与しているという認識がある。それゆえにこそ、原発問題では「都市こそ現地」なのであり、そこに現れる問題は現代社会とそのなかで生きる（生きざるをえない）自分達自身に深く突き刺さる、とリアルに感じとられている。そして既存の運動にはこうした認識は求めるべくもなく、それゆえ都市のただなかに生活している自分たちの暮らしへの自己反省を伴いながら、そこから必然的に現れた運動、として自らを位置づけている。

この特質は、運動する主体の深い転換を象徴的に示唆している。公害告発運動に代表される1970年代以降の住民運動がさし示してきたことは、現代においては運動者もまた公害や自然破壊をはじめとする現代社会の矛盾の中枢に深く囚われ、無意識のうちに関与してしまっている、という原罪的認識であり、それゆえにこそ運動する（せざるをえない）という二重性を深く刻印されていることである。運動する主体として、現代の病から無縁ではいられない。我々はみな、被害者であるとともに加害者でもあり（とりわけ第三世界に対して）、単純な意味での我々自身の救済だけでは少しも問題の解決にならない、という二重化した意識が運動を覆っているのである。この複雑に重層している問題を前にして、運動は、単純明快に敵の非を鳴らす

だけでは済まなくなる。名古屋の運動には、こうした自己回帰的な意識が含まれている。

そこに相応するかたちで、全共闘運動らしいの幾多の運動経験から継承された、運動を組織する上での様々な工夫が注意深く施されていて、組織としての拘束性をできる限り排除しようとしている点も特筆されよう。例えば、運動の代表者を置かない、会費や会則を作らない、何事も充分話し合っただけで決められるように運動体の規模を20名内外に止める、などである。こうした原則が、かたちの上だけのものではなく、運動の本来性を守るための原理として貫かれている。この特徴は、ネットワークと呼ばれる、いま流行りの運動組織論と近いところも多い。しかし一般に理解されているものものとは異なり、この場合のネットワークとは、「顔の見える関係」をもとにした徹底した個人信頼ゆえに可能な、ゆるやかな関係なのである。こうした信頼関係を基礎にしてはじめて、組織的拘束の縮減が可能になっている。この運動体が単なる仲良しクラブ的なものにならない理由はそこにある。したがって組織度の低いことがこの運動体の未熟さや、運動密度、緊張感の欠如を意味するのではない。組織としての拘束性を取り除くことが、慎重な配慮のうえで大胆に行われているのである。

この特質ゆえ、運動組織としての不安定さや小規模化といった問題も孕まれてくる。かれらもこの問題に気づいている。しかし、かれらには、運動の組織実体よりも、運動する個々人の自発性や自由度といった運動の内実のほうが大切であると信じられている。水ぶくれして、互いの顔も見えないような大きな組織実体を取り繕うよりも、たとえ不安定であるとしても、運動をそれ自体ひとつの相互教育の場であらしめようとする。参加する人々は、そこに既にあ

るものを学んで運動者になっていくのではなく、組織に頼らず、参加者があくまでも運動する主体であることを求められる。その意味でこの運動体のいう組織論は、ネットワークという輸入思想ではなく、徹底した人づくりのための地道で根本的な方法をとっているのである。このことは、全国的なネットワークに関しても言うことである。かれらの考えるネットワークとは、単なる情報の流通のことではない。全国的な連帯を求める場合にも、「地域を拓くシンポジウム」に代表される、濃密で持続的な付き合いを前提とした信頼関係を抜きにしては考えられないのである。

この組織論上の革新の試みもまた、運動主体の転換にかかわってるところであろう。

＊

第二の特徴は、運動の敵手の問題にかかわる。

トゥレーヌは反原子力運動について、それが社会支配の中枢を攻撃でき、脱産業化社会における社会的敵手（テクノクラート）をもっとも適確に把握している運動、として＜新しい社会運動＞の代表例として挙げている（Touraine他〔1980=1984〕）。だが、はたして状況はそれほど明らかなのだろうか。

名古屋に限らず、さまざまな運動体へのインタビュー調査から浮かびあがってくるのは、運動者自身が、トゥレーヌの言うような新しい実体的な社会的敵手の規定を明確には得られず、苦しんでいる姿であった。それは単にフランスと日本との国情の違いということに還元できない。例えば名古屋の「五月民衆ひろば」や、富山や熊本での「地域を拓くシンポジウム」に参加してみると、運動者自身が口にする、運動者の「金太郎飴」化という現象が目立つ。これは運動者のなめらかな世代交替が進まず、どの会合に出ても同じ顔ぶれに出会う、という現象である。

近年の社会構造や状況の変動につれて、運動をとりまく環境は厳しくなっている、と受け止められている。運動者の世代交替の難しさは、こうした時代の若者の保守化、保身化現象によるところが大きい。ハイテク社会、消費社会と呼ばれる現在の資本制の自己肯定の華やかな動きとも通底し、連動している事態である。

こうした大きなうねりの中で、昔と少しも変わらぬ社会的敵手像を保持する旧社会運動の唱える「大状況を撃つ全国政治闘争」というようなヴィジョンが、人々を吸引しなくなったのは当然かもしれない。ここに花崎や名古屋の運動が改めて「地域」に着目した理由が見えてこよう。花崎のいう「地域」とは現にある地域共同体そのものではない。「地域を拓く、地域になる」という言い方が示すとおり、それは非在の〈地域〉を求める方法的な概念である。運動者の足下の地域を見渡すと、全国的な（保守的）政治構造よりももっと堅固でリアルな、人々の保守性の原基ともいべきものに突き当たる。名古屋の「五月民衆ひろば」においても、それは「草の根天皇制」とか、生活保守主義とかいうふうに探り当てられ、問題にされてきていることであった。ハバーマスの言うような「生活世界の植民地化」は、大きな政治・社会構造の変化と同時に、民衆の側の不定型な欲望や欲求に感応するかたちで、むしろ積極的に生活世界の方へと呼び寄せられてきたことでもあるのだ。原子力発電が、科学技術的な問題を多く残しながら、都市生活者大衆の消費生活上の欲望に滑り込み、原発立地地の人々とは切り離された都市人の、暗黙の肯定を受けつつあることと、それは同型的な事態である。

北海道の花崎や名古屋の運動にとってのリアルな敵手とは、自分達もその一員であるところの地域共同体そのものなのであった。それにく

らべれば、中央提唱型の大状況問題やら全国政治闘争などは、どこか抽象的な空像のように見えてくる。むしろ根本的な問題や敵手は、社会の自分たちの足下の地域の中にあって、大きな政治はその必然の帰結にすぎない、と見えたとき、花崎らが「地域を拓く」ということの意味が見えてくるだろう。

名古屋の反原発運動が「都市こそ現地」と位置づけている理由も、ここにある。

＊

第三の特質は、係争目標の転換にかかわる。それは、一般には運動目標のオルタナティブ性として理解されているものである。「オルタナティブ」とは語源的には、もうひとつのもの、とって代わるべきもののことを言う。そこから、現にある社会の在りかたの他に、もうひとつ別の途のありうることを示し、それを例示的に生きてみせ、その可能性と実効性を実証しようと図る運動のことを指すようになった。それがオルタナティブ運動である。エコロジー運動は、現代におけるそのひとつの典型を示す。エコロジー運動とは、産業化社会（資本主義、社会主義をともに含む）の価値基準とは別の、自然との共生を基本価値として社会を営もうとする試み、として定義できよう。

その意味では、名古屋の運動は（狭義の）エコロジー運動とはいえない。現存社会をア・プリアリに拒否し、その対極にオルタナティブとしてのエコロジー的ユートピア社会像を立てて、そこから原発やそれを必要とする社会を批判する、という超越的な位置に立つものではない。それは、社会を前近代へと逆行させるというようなあり得ない原理主義ではなく、運動を硬直的に支配する嚮導原理としてのエコロジー主義でもなく、もっと自然に運動のなかから醸成され徐々に浸透してきた運動者のライフ・スタイ

ルとしてのエコロジー的なるものである。それは、エコロジー思想にもとづく運動というよりは、エコロジー感覚とでも呼ぶべきもの、いわば内発的な運動文化といった形をとって現れてきているものである。それが名古屋の場合のエコロジーである⁽³⁾。

名古屋の運動スタイルは、あくまでも原発の科学技術的な欠陥や危うさを突き、こうした未完成で危険な技術を強引に推進しようとする(推進せざるをえない)電力会社や行政の矛盾を告発する、というかたちをとっている。それは原発に象徴される「科学」や「近代」をア・プリオリに拒否しようとするエコロジー主義とは微妙に、しかし確実に異なっている。しかし原発問題は、原発に関する科学技術的議論の土俵の上だけで解決する問題ではない、とも深く認識されている。それは原発立地現地の地域経済や地域共同体の過疎による崩壊、解体の危機にからむ問題でもある。同時にまた資源利用にからむ第三世界の搾取や核兵器への転用の危険性とながりの深い問題でもあり、単なる科学技術論争の土俵では決着のつかぬ射程を孕んでいる。こうした彫りの深い問題群は、特定地域への原発建設を反対しただけで解決するものでないことは、もとより認識されている。それゆえこの運動では、機関紙を分析してみると、科学技術的論争や政治問題の他に、すこし遅れて、日々の生活の根本的な見直しを問う記事が現れ始めることがわかる。ただ、この生活の見直し、というエコロジー的なテーマそれ自体だけが肥大し自己目的化してはいない。反原発運動を、個人の日々の生活倫理の中へと縮小還元してしまうことはなく、あくまで社会運動として反原発をとらえている。その意味でもこの運動は、エコロジーをめざす(だけの)運動とは区別されよう。

*

以上、見てきたとおり、名古屋の運動は、日本における「新しい」社会運動の、ひとつの典型例を示してくれている。この運動展開の中に、更にく新しい社会運動へと突き抜けてゆく可能性の萌芽は見られるだろうか。例えば、西独の「緑の党」のような、あるいは、トゥレーヌの構想するような「政治的エコロジスト」の媒介による新社会運動と旧社会運動との統合と、運動状況の一新、というような可能性が描けるだろうか⁽⁴⁾。

そうした可能性もなくはないと思う。例えば筆者の見聞した限りでは、名古屋における「五月民衆ひろば」の試みや、花崎らの「地域を拓くシンポジウム」などがそれである。その他にも日本全国で、さまざまな試みがなされていることと思われる⁽⁵⁾。

しかし「五月民衆ひろば」が結果的に必ずしも成功したとはいえないように、各地の住民運動や市民運動が現在突き当たっている状況は、新社会運動の可能性にとって、楽観的なものばかりではない。

3. 新しい社会運動と現代

新社会運動が現在、直面している問題には、大きく分けると二つの水準があると見てよからう。それは、原理的・理論的水準での問題(運動の三要素にかかわる)と、日本の政治状況にかかわる問題とである。そして、より根本的なものは前者である。

*

社会運動を構成する基本的な要素が、次第にそれぞれ独立に変容しはじめている。そのことが「新しい」社会運動を多様に生成することを可能にし、またそれゆえに様々な問題も生じ

させている、というのが名古屋をはじめとするいくつかの運動を見て得たひとつの感想である。ではその理由はいったいなにか。

現在、新社会運動が抱えている問題とは、一般的に言って、各運動体が小さく自足してしまっていて運動体相互の連帯や連携が充分出来ない、運動者の世代交替がはかばかしく進まない、運動の進むべき方向性が見えにくい、新運動と旧運動との交叉点が見つけにくい、新運動と旧運動とが相互に交通を欠いて並立しているだけである、などといったことであろう。

それは端的には、運動の構成要素を総合し、統括する、より上位の求心点ともいうべきもの（トゥレーヌの用語系では全体性 *totalité* がそれに近い）の在処の問題に関係している、と見るべきである。

各地の新社会運動が共通して抱える問題とは、この運動要素のより上位の求心点までもが、現在、運動構成素とともに揺れ動き出して、行方が容易に定まらない、ということではないだろうか。したがって、さまざまな新運動が現れるが、＜新しい社会運動＞へと収斂していく方向がなかなか見えてこないのである。運動の根幹までもが揺れているから、社会の大きな流れに竿さして、時代状況と正面から対抗できるだけの勢力が築けない。現在、新運動も含めて社会運動勢力はそう小さなものではない。しかし、社会運動セクター全体が、かつてのように、国家や体制に拮抗して、独自の対抗性を発揮する、ということが難しくなりつつあるように見える。その理由のひとつに、運動の側に状況に左右されない、より上位の求心点ともいうべきものの存在が不明確化して、社会運動全体が、いわばアド・ホックに状況に対応するようになってきていることが挙げられよう。そのことは一般的には、運動を硬直したイデオロギー

から解き放つという積極的な効果をもたらすとともに、他方では、状況のうねりの中へ、定点を持たず（持てず）に放り出されることをも意味する。

＊

運動の規模からいうと日本の新社会運動は、まだ細々としたものにすぎない。しかも、運動目標がシングル・イシュー（単目標、単争点）であることが多く、そのこと自体は原理的には決して運動の弱点でも欠陥でもないのだが、運動誕生期ゆえの未熟さや不安定さがそこにあいまって、新社会運動相互の交流や連帯、連合の滑らかな進展を難しくする傾きが見られる。ましてや労働運動を代表とする旧社会運動との連携や連合は当面、相当に難しそうな状況である。

こうしたことすべてが必ずしも、運動構成素やそれを統括する全体性の問題へと収斂していくわけではないかもしれない。しかし、新社会運動の出現やその展開を、単に政治状況的文脈や旧運動の硬直化などの原因に還元できるわけでもない。新社会運動の出現は、社会運動を構成するすべての要素の変動と転換とを含んで起こっている、と見るべきである。

＊

では、運動を統括するより上位の求心点が、さまざまに分岐、分裂したまま再統合されず、運動の低位要素の差異化ばかりが始まってしまったことは、何に起因するのだろうか。そこを考えるには、運動を統括する求心点とは何か、ということから改めて問い直さねばならないだろう。この問いに本格的に取りくむには、稿を改めねばなるまい。ここでは簡略に、当該社会の現状をどう見て、どう位置づけるか、そしてそれに対してどう批判的に関与するか、という根本的な社会認識と行動のオリエンテーション、

と見ておこう。

〈新しい社会運動〉論は、その当初の問題意識としては、「脱産業化社会における新しい種類の紛争の発生」（ハバーマス）の解明にあった。それは、「脱産業化社会」の他にもさまざまな命名や分析を受けつつ、そこから逃げ去っていく変幻自在な資本主義社会の現在を、どうとらえるか、どう解きほぐすか、という問題意識と切り離しえないものであった。

しかし、この不断に変転してとらえ処のない資本主義の現在の姿を前にして、既存の社会運動諸組織は、いかなる対応をしてきたらうか。後期資本主義社会の不断の変容の速度に比べ、社会運動の側のこの変化への対応は、著しく遅れ続けてきた。新社会運動が生成してくる一番深い理由は、こうしたところにあったはずである。

しかし、新社会運動においても、この後期資本主義社会の変容に的確に対応し、適切なオルタナティブを構想できているか、となるとはなはだこころもとないように思われる。そのことは、なによりも新社会運動に対する人々の反応が物語っている。端的に言って、新社会運動もまた、現在の後期資本主義社会下の人々を充分ひきつけるだけの力を持っていないように見える。人々の政治感覚の深層に食いつき、それを変革していくだけの効果を持った認識や方向性を未だ見出してはいないように思われる。したがって、人々のリアリティ感覚へ、運動の声が充分届いていかない。ただし、人々は必ずしもこの現在に自足しきっているわけでもない。名古屋の事例においても、エコロジーやフェミニズムの運動には、従来の運動者とは全く資質もタイプも異なった人々が参集してきているし、運動を調査していて、こうした「新しい」運動に参加している人達が、いま最も活気に満ちて

いる、という強い印象を受けた。現在のところ、日本の新運動は未だ力量不足かもしれないが、今後、日本においても、西独の「緑の党」のような、或いは全く違った日本独自の新社会運動の沸騰現象が起きないとも限らないのである。

4. 結論

日本においても、新しい社会運動の様々な生成が見られるようになってきている。それは、たんにこの2、3年の表層的な現象ではなく、1960年代からの公害告発運動や1970年代の住民運動を基盤にして、その流れの上に現れてきているものである。ただし、今のところ、この「新しさ」は運動を構成する要因の個別的な「新しさ」の次元に留まっていて、社会運動を総体として新次元へと離陸させていくほどの革新には至っていないようにみえる。それゆえ、「新しい」社会運動のさまざまな簇生は、当面、社会運動を更に細かく細分化させていってしまう傾向も持つ。また、運動をめぐる政治環境の成熟度の違い等もあって、日本における新しい社会運動の展開は、欧米諸国における「政治的エコロジー」運動やネットワーク運動の活性、といった運動状況とはいささかことなっている。しかしながら、日本の運動には、1960年代からの公害告発運動や住民運動からの連続性という歴史的な厚みがあって、欧米の〈新しい社会運動〉理論の単なる輸入や模倣といったことではなく、内発的で創造的な運動形成が試みられる条件も揃っている。そこから、欧米モデルとは異なった運動展開の次元が切りひらかれ、独自の〈新しい社会運動〉が生成してくる可能性も秘められていよう。

現在現れているさまざまな新社会運動体は、それぞれ独立してそれぞれの社会運動を闘い続

けるだろう。しかし、運動係争点のみならず、運動主体や運動敵手などの運動構成素全体も次第に深く変容しつつある。そのことが、新社会運動を更に細かく細分化させていってしまうという傾きもある一方、「地域を拓くシンポジウム」などに代表される、地道なねばり強い努力と交流の模索の中で、現在の諸運動が、〈新しい社会運動〉へと転生していく新たな契機が発見されていくかもしれない。その可能性は、決して小さくないだろうと思われる。

注

- (1) 「新しい社会運動」とは、1960年代後半から欧米諸国を中心に出現してきた新しいタイプの社会運動を指す。以下の文献参照。
安立〔1985〕、安立・高橋〔1985〕、Eder〔1982〕、Habermas〔1981〕、梶田〔1985〕、Melucci〔1980〕〔1981a〕〔1981b〕〔1984〕、Touraine 他〔1980a〕〔1980b〕。
- (2) 高橋徹教授を中心に、筆者を含めた7人の研究者によって、1983年に着手され、いまだ継続中の調査である。本稿は、その中間報告にあたる。

文献

- 安立 清史 1985 「後期資本主義下の社会運動」、『ソシオロギス』9。
- 安立清史・高橋徹(編) 1985 「社会運動論関連年表」、『思想』737。
- Castells, M. 1976 "Theoretical propositions for an experimental study of urban social movements" = 1976 Pickvance (ed.)
- Eder, K. 1982 "A New Social Movement?", *TELOS*, 52。
- Freeman, J. 1975 *The Politics of Women's Liberation* = 1978 奥田暁子・鈴木みどり訳『女性解放の政治学』、未来社。
- Habermas, J. 1981 "New Social Movement", *TELOS*, 49。
- 藤原 新也 1983 『東京漂流』、情報センター出版局。
- 80年代編集部(編) 1985 『もうひとつの日本地図』、野草社。
- 花崎 泉平 1985 『地域をひらく一生きる場の構築一』、農山漁村文化協会。
- 反原発事典編集委員会 1978 『反原発事典1』、現代書館。

る。なお、本稿の骨格となったのは、1985年11月の日本社会学会大会一般研究報告での筆者の報告である。

- (3) 欧米から直輸入された「エコロジー」運動には、すくなくとも異和感を抱いている。そしてむしろ、「アジアからのエコロジー」、「第三世界からのエコロジー」なるものを構想しようとしている点も、注目に値する。
- (4) トゥレーヌは「政治的エコロジー」を、エコロジスト・科学者・労働組合運動家の結合による、社会的敵手を的確に把握した政治的指向性を持った運動、と定義している。だが、日本においては未だトゥレーヌ的な意味での「政治的エコロジー」は現れてはいない。しかし、たんに自然と人間との共生というだけのエコロジーにとどまらない、社会的・政治的射程をもつエコロジカルなライフ・スタイルや運動の志向性は、全国各地に幅広く現れてきている。
- (5) 野草社：80年代編集部編『もうひとつの日本地図』(1985)などは、そのような運動体のカタログである。

- 1979 『反原発事典2』, 現代書館。
- 橋爪 大三郎 1982 「原子力立地の新たな攻勢」, 『技術と人間』 11-6 (107)
- 1985 『言語ゲームと社会理論』, 勁草書房。
- 石牟礼 道子 1969 『苦海浄土—わが水俣病』, 講談社。
- 1980 『天の魚—続・苦海浄土』, 講談社 (文庫版)。
- 石牟礼道子 (編) 1972 『水俣病闘争 わが死民』, 現代評論社。
- 梶田 孝道 1985 「新しい社会運動—A. トゥレーヌの問題提示をうけて—」, 『思想』 730。
- 加藤 典洋 1985 『アメリカの影』, 河出書房新社。
- 松本 健一 1985 『死語の戯れ』, 筑摩書房。
- Lipnack, J. & Stamps, J. 1982 *Networking* = 1984 正村公宏監訳『ネットワーキング』 プレジデント社。
- Melucci, A. 1980 “The new social movement; A theoretical approach”, *Social Science Information*, 19-2。
- 1981 a “New Movements, Terrorism, and the Political System: Reflections on the Italian Case”, *Socialist Review*, 56。
- 1981 b “Ten Hypotheses for the Analysis of New Movements”, D. Pinto (ed.), *Contemporary Italian Sociology*, Cambridge University Press。
- 1984 “An end to social movement?: Introductory paper to the sessions on ‘new social movements and change in organizational forms’”, *Social Science Information*, 23-4/5。
- Miller, S. M. 1983 “Coalition Etiquette: Ground Rules for Building Unity”, *Social Policy*, 14-2。
- 見田 宗介 1985 「〈透明な人々〉の呼応」, 『朝日新聞』 11月28日。
- 村上 泰亮 1984 『新中間大衆の時代』, 中央公論社。
- 仲井 斌 1985~1986 「緑の党—その実験と危機」 1~7, 『世界』。
- Pickvance, C. G. (ed.) 1977 *Urban Sociology: Critical Essays* = 1982 山田他訳『都市社会学』, 恒星社厚生閣。
- 桜井 哲夫 1985 『ことばを失った若者たち』, 講談社。
- Simonnet, D. 1979 *L'Ecologisme, Que-sais je?* (No 1784) = 1980 辻由美訳『エコロジー』, 白水社。
- 高木 仁三郎 1979 『科学は変わる』, 東洋経済新報社。
- 1982 『わが内なるエコロジー—生きる場での変革—』, 農山漁村文化協会。
- 1985 『いま自然をどうみるか』, 白水社。
- 高橋 徹 1985 「後期資本主義社会における新しい社会運動」, 『思想』 737。
- 竹田 青嗣 1985 a 「陽水の快楽—井上陽水論 1」, 『文藝』 24-6。
- 1985 b 「陽水の眩暈—井上陽水論 2」, 『文藝』 24-12。
- 谷川 雁 1958→1963 『原点が存在する』, 現代思潮社。

- 1963 『工作者宣言』, 現代思潮社。
- Touraine, A. 1973 *Production de la société*, Editions du Seuil.
- 1978 *La voix et le regard*, Editions du Seuil. = 1983 梶田孝道訳『声とまなざし』, 新泉社。
- 1980 *L'après socialisme*, Grasset = 1982 平田清明・清水耕一訳『ポスト社会主義』, 新泉社。
- A. Touraine, F. Dubet, Z. Hegedus, M. Wieviorka 1980 *La prophétie anti-nucléaire*, Editions du Seuil. = 1984 伊藤るり訳『反原子力運動の社会学』, 新泉社。
- 1981 *Le Pays contre l'Etat : Lutttes Occitanes*, Editions du Seuil. = 1984 宮島喬訳『現代国家と地域闘争』, 新泉社。
- 宇井 純 1971 『公害原論』1~3, 亜紀書房。
- 1974 『公害住民運動』, 亜紀書房。
- 山崎 正和 1984 『柔らかい個人主義の誕生—消費社会の美学』, 中央公論社。

(あだち きよし)